氏　　名：	石田　優
学位の種類：	博士（芸術工学）
学位記番号：	課博第 151001 号
学位授与年月日：	平成 28 年 3 月 19 日
学位授与種類：	学位規定第 4 条　第 1 項該当（課程博士）
学位論文題目：	ヴィトゲンシュタインの建築に関する研究 ―ストンボロー邸の二重ドアについて―
専門委員：	小山明教授、小玉祐一郎教授、岡部憲明教授、 矢代眞己（日本大学短期大学部　建築・生活デザイン学科教授）

審査結果の要旨

本論は、哲学者ヴィトゲンシュタインが生涯に唯一建築の設計を行ったウィーンのストンボロー邸の空間構成に関する研究である。各部屋の内部空間は全く無装飾であり、多くのドアが配置されていることにこの建築の特徴がある。

ストンボロー邸は著書『論理哲学論考』と『哲学研究』の二つの執筆活動の中間の時期に設計・建設の行われた建築であり、この建築に関する研究は建築の領域のみならず、ヴィトゲンシュタインの全体像を把握するためにも役立つものであると考えられる。

研究の方法としては、各部屋における空間構成を観察し、壁面の強い左右対称性を作り出している造形エレメントとしてのドアの存在に注目し、ドアの寸法体系を分析することから個々の部屋を比較し、その寸法の共通性や差異から全体の空間構成を考察している。このため、現地にて二度の実測調査をおこない、分析に必要な精度の高い寸法情報を得て研究をすすめている。

論文は以下の六つの章から構成されている。

第一章では、研究の目的と方法を記述し、1970 年代の建築保存運動と並行して始まったストンボロー邸に関する国内外における既往研究の紹介を行い、こうした研究領域における本論の位置づけを行っている。またこの研究を進める上で特に重要な概念となる「ドア」「寸法体系」などの本論で使用する用語の定義を行っている。

第二章においては、ヴィトゲンシュタインが哲学の研究を始める前に行っていた精密機械工学や航空工学などに関する研究活動をはじめ、ストンボロー邸の設計を行うことになった経緯、特に共同設計者である建築家パウル・エンゲルマンとの関係を記述している。当初エンゲルマンが進めていた建築計画案に様々な変更を加え、装飾を排除し、二重ドアの複雑な開閉機構や昇降機、暖房設備などのメカニズムの設計を行い、現場における厳密な施工指示を行っていたことまでをも含めて、この建築に対するヴィトゲンシュタインの強い関与のあり方について述べている。

第三章においては、ストンボロー邸主階の構成に関する分析を行っている。主階の各部屋に存在するシンメトリーな壁面を作り出すドアの配置方法の特徴、主階にのみ配置されている二重ドアの特徴、ホールを中心とする空間のヒエラルキーの存在に触れて、ストンボロー邸を建築学的にとらえる場合「ドア」のあり方を手がかりに、それらの種類、配置方法、寸法などを比較することで、部屋と部屋との関係および全体の空間構成を把握する方法が有効であることを考察している。

第四章においては、実際に現地ウィーンで二度の実測調査を行った結果をまとめている。レーザー測距器を使用して測定した主階のすべての部屋の寸法とドアの寸法に関して得られた数値と、これまで確認されている様々な図面類に表れた数値を照合した各寸法比較表、すべてのドアに関する建具表、各部屋の展開図等を作成し、分析のための基礎となる情報の整理とそれらの視覚情報化を行っている。また、各部屋の寸法から、それぞれの面積および床面のプロポーションの比較、部屋の容積の比較を行っている。

第五章においては、ドアの種類（一重・二重、ガラス・鉄）とそれらの配置の特徴を

考察している。ドアの開閉パターンを分類し、奥行きの深い二重ドアが前後に全開となった状態の立体的かつ特殊な形状に注目している。また、各部屋のドア開口部の高さと天井高の比率の比較を行い、それぞれの部屋が自律的な内部寸法の秩序を有していることを明らかにしている。また、部屋と部屋とをつなぐ二重ドアはその前後において寸法が異なり、両側の部屋の寸法の秩序を調整する機能を与えられており、二重ドアは、それぞれの部屋の壁面の左右対称性を構成する造形エレメントとして存在すると同時に、それぞれの部屋の内部空間をドアが開いた際の立体的な形状で接続を行う、ホールを中心とする空間構成に重要な役割を担っていることを考察している。

第六章は論文全体のまとめにあてられている。

[評価]

ストンボロー邸の空間構成の研究を行う方法として「ドア」に注目し、その寸法の比較から主階のホールを中心とする５部屋の関係を考察した点が、これまでにはない研究の方法として評価することができる。また現地において複数回の実測調査を行い、精度の高い実測データを整理して分析を進めたことは、これからこの建築の研究を進める他の研究者からの参照に耐え得る研究基盤の構築につながり高く評価できる。実際に、これらの寸法に関するデータを正確かつ厳密に整理し、二重ドアの前後の寸法の比較を進めたことからそれらの両側の寸法が異なることが明らかになり、それぞれの部屋の内的な秩序の存在とそれらを接続する二重ドアの役割と、ホールを中心とする主階全体の空間構成を考察することが可能となっている。

ストンボロー邸は哲学者が設計を行った特異な空間であるが、これを建築の領域から「寸法体系」という他の学問領域にも共通して通用する言語で研究を進めた点が、これからの哲学や論理学など他領域からの研究に役立つ基礎的な研究となるものであると考えられる。

一方で、継続すべき次の研究段階としては、現在のドアの二次元的な寸法の分析の延長として、三次元的な分析を進める展開が望まれる。また、当時のウィーンの建築の動向を含めた近代建築史におけるこの建築の位置づけを試みることが期待される。

論考は、建築学と他領域との横断的な文化論への可能性を有しており、また、新しい造形理念・造形語法の探究を目指す神戸芸術工科大学にとっても、重要な研究論文となると考えられる。

平成 28 年 1 月 13 日、芸術工学研究科において、審査員全員出席のもとに論文の説明を求め、周辺事項も含めて質疑応答を行い、合議の結果、本論文執筆者は博士（芸術工学）の学位を受けるに十分な資格があることを全員一致で確認した。